

太平洋を描く

— 中島敦のステイヴンソンとステイヴンソンのサモア

山 本 卓

Representing the Pacific :

Nakajima Atsushi's Stevenson and R. L. Stevenson's Samoa

YAMAMOTO, Taku

金沢大学外国語教育研究センター

『言語文化論叢』第15号

2011年3月刊

Foreign Language Institute

Kanazawa University

Studies of Language and Culture

Volume 15

March 2011

太平洋を描く

—中島敦のスティーヴンソンとスティーヴンソンのサモア

山 本 卓

R. L. スティーヴンソンは戦前の日本において高く評価されてきたが、彼を物語の題材として扱った点で中島敦の存在は際立っている。1942年に世に出た『光と風と夢』は、スティーヴンソンのサモアでの晩年を書簡や伝記から再構成したものである一方、とりわけ後半部において、作家は想像力を発揮し彼独自のスティーヴンソンを作り上げる。こうした作風は、結核に冒されながらも精力的な執筆活動を行ったスコットランド人作家に、中島敦が幼い頃より喘息に苦しみつつも物語を愛してやまなかった自分自身の姿を重ね合わせたためだと言われている。しかしながら、『光と風と夢』が描き出すスティーヴンソン像には、南の島という舞台が大きな役割を果たす。ヨーロッパと太平洋の物理的な距離によって形成される隔絶感やエキゾティシズムが、孤独な英雄としての主人公の姿を強調するのである。

本論考は『光と風と夢』におけるスティーヴンソンの表象のされ方を手がかりとして、太平洋のイメージが作品や作家像に与える影響について検証する。太平洋の島々を訪れたスティーヴンソンは、現地人の窮状を訴えるためにサモア紛争にも積極的に関与し、小説や随筆といった手段を問わず、太平洋の「現実」をヨーロッパに伝えようとした。しかしながら、実際には彼の意図は必ずしもうまくいったとは言えない。本論では、そうしたスティーヴンソンの試みが成功しなかった理由を、中島敦のスティーヴンソン観、ロマンス物語と「太平洋」の近接性、さらには作家自身の自己表象を通して分析し、太平洋の「現

実」を描くことの困難さを指摘したい。

I サモアにおけるスティーヴンソン

テキストの分析に入る前に、ここでスティーヴンソンのサモアでの生活と、当時のサモアを巡る状況を確認しておく。スティーヴンソンがサモアで客死したのは、彼の生来の病弱さが原因である。父トーマスの死後、医者勧めでスコットランドを離れてアメリカに移り住んだスティーヴンソンは、1888年に温暖な環境を求めて南太平洋への船旅を決心する。約2年をかけてマルケサス諸島やタヒチ島、ハワイ、ギルバート諸島を回った後、1889年12月にサモアに到着している。当初、彼はサモアに定住する意志はそれほど持ち合わせていなかった。実際、翌年2月にオーストラリア訪問を計画したときには、スティーヴンソンは数ヶ月のシドニー滞在後に英国に帰るつもりでいたのだ。しかしながら、シドニーで咯血し、帰郷がかなわないことを自覚する。1890年11月にサモアに戻ったとき、彼の地を永住の場所と決めたのである。

当時のサモアは、イギリス、ドイツ、アメリカの列強による帝国主義紛争の渦中だったが、その発端は1870年代に遡る。19世紀初頭に宣教師の手によってキリスト教化されたサモアは、19世紀中葉には南太平洋の交通の要所としてその地政学的重要性が認知されるようになる。1878年にアメリカがパゴパゴ湾（現アメリカ領サモア）に軍港建設の許可を得るための修好条約を締結した後、翌年にはドイツとイギリスが同様の修好条約を現地政府と結ぶ。さらに、1880年には3国の代表による統治条約が結ばれる。

こうした帝国主義的な軍備競争の動きの一方で、サモアのコブラ貿易がサモア紛争に大きな影響を与える。1850年代に画期的なコブラ生産技術の確立に成功したドイツのゴドフリー商会が、サモアの経済の実権を掌握し、その政治体制にまで大きな発言力を有するようになるのだ。彼らは長らく続いていた部族間の紛争からコブラ権益を守るために、経済支配のさらなる強化を求め、こうした意向が、ビスマルク政権による海外拡張政策と呼応する。ヨーロッパの帝国主義の流れに遅れてやってきたドイツが、太平洋の貿易拠点としてサモア

での実質支配に着手するのである。当然のことながら、ドイツは、以前からサモアに関わってきたイギリス、アメリカと対立し、その解決策として 1880 年の条約に至るのであるが、3 国が傀儡の王としてラウペペを選んだことは、サモアに内戦状況を作り出すことになる。1881 年 4 月にタマセセがアトゥアとアナ地域での王位を宣言し、マターファがそれを継承した後、マターファを支持する部族と大国が擁したラウペペとの間に内戦が勃発する。

こうした状況が数年続いた後、1887 年に英米独の間で会議が開かれ、ラウペペを国外追放にする一方で、ドイツの主導の下で新しい王としてタマセセを擁立する。しかしながら、次第に実質的なサモア支配を強化するドイツの政策にアメリカとイギリスは反発を強め、翌年のマターファによる王位の宣言によって、再びサモアの部族政治は混乱状態に陥る。ドイツはタマセセの側につき、アメリカとイギリスはマターファの支持にまわるのである。マターファによるゲリラ戦に手を焼いたドイツは、最終的に軍艦の派遣を決定し、それに応える形でアメリカとイギリスも派兵を決めたため、サモアの内戦は大国間の紛争へと発展する兆しを見せる。しかしながら、1889 年にサモアを襲ったハリケーンによって、アピア湾に集結していた 3 国の軍艦 6 隻が沈没するに至って、英米独は平和的な解決を模索し、同年ベルリンで条約が締結されるのである。

スティーヴンソンがサモアの政治問題に関与し始めたのは、こうした紛争に一応の決着がついたときだったのだ。もちろん、ベルリン条約以降も部族間の緊張は続き、けっしてすべてが解決されたわけではなかった。1893 年にはマターファが、タマセセの後に王位に復帰したラウペペとの戦いに敗れ、刑務所に収容された後、海外に追放される。マターファはかねてよりサモアの民衆の支持を集めていたし、しかも彼の投降が無用の流血を避けた無条件降伏だったこともあり、サモアの英雄への列強の処遇は、サモア人の列強支配への反感を強めただけであった。サモアに住み始めたスティーヴンソンは、現地の人々を顧みない大国の論理に憤り、『タイムズ』への書簡や「歴史への脚注」を執筆するのである。

II 『光と風と夢』と孤独なスティーヴンソン

『光と風と夢』が執筆されたのは、中島が横浜高等女学校で国語の教師として教鞭を執った1940年から41年にかけてといわれているⁱ。執筆にあたってどのような資料を彼が持っていたのかは明らかになっていないが、岩田一男の研究によると作品は1890年から94年にかけてのスティーヴンソンの書簡をまとめた『ヴァイリマ通信』を中心に、エッセイ『南海にて』や「歴史への脚注」、グレアム・バルフォアの『スティーヴンソン伝』などに依拠しているというⁱⁱ。中島はこうした資料をかなり自由に使用し、彼独自のスティーヴンソン像を作り上げる。

『光と風と夢』が提示するスティーヴンソンで印象的なのは、作家としての自分自身のあり方に苦悩する姿であろう。中島は「生まれながらの物語作家」(170)ⁱⁱⁱであるスティーヴンソンに「未だに大衆を信ずることが出来ない」(187)と言わせたり「既に私は、自分に出来るだけの仕事を果して了ったのではないか。それが記念碑として優れたものか、どうかは別として、私は、兎に角書けるだけのものを書きつくしたのではないか。」(195)といった独創部分を随所に付け加え、自己懷疑に襲われる作家像を創造する。

こうした人物造形を行うにあたって、中島はスティーヴンソンが置かれた孤独な状況を過度に強調する。『光と風と夢』の開始部分で、語り手はスティーヴンソンが太平洋を訪れた理由を簡潔に述べ、終生そこにとどまる決意をしたスコットランド人作家の手紙を添える。

しかし、彼は、やがて、在英の一友人に宛てて次の様な手紙を書かねばならなかった。

「……実をいえば、私は、最早一度しか英国に帰ることはないだろうと思っている。そして其の一度とは、死ぬ時であろう。熱帯に於てのみ私は纔かに健康なのだ。(中略)霧の深い英国へ帰るなど、今は思いも寄らぬ。……私は悲しんでいるだろうか？ 英国にいる七・八人、米国にいる一人二人の友人と会えなくなる事、それが辛いだけだ。それを別にすれば、寧ろサモアの方が好ましい。海と島々と土人達と、島の生活

と気候とが、私を本当に幸福にして呉れるだろう。私は此の流謫を決して不幸とは考えない……。」(105-6)

これは1890年8月にスティーヴンソンがシドニー・コルヴィンに宛てた書簡を、ほぼそのまま引用したものである。『ヴァイリマ通信』では省略されたこの部分を中島はあえて作品の冒頭に配置し、物語展開の方向付けを行う。健康に不安を抱えた作家は「健康地を求めて転々」(105)とした後、最終的にサモアに流れ着き、彼の地に居を構えることになる。しかしながら、それは「其処で便船を待合せて、一旦英国に帰るつもりだった」(105)というスティーヴンソンの当初の計画を完全に裏切るもので、いわば彼は肺病によってヨーロッパからサモアに隔離されるのである。そうした背景を踏まえると引用の最後を締めくくる「私は此の流謫を決して不幸とは考えない……。」という一節は、とりわけ文尾の省略記号によって、文面とは対照的なスティーヴンソンのヨーロッパへの希求を醸し出す。

孤独なスティーヴンソン像は、「英国にいる七・八人、米国にいる一人二人の友人と会えなくなる、それが辛いだけだ」という作家の嘆きを、作中で繰り返し提示することによっても作られる。たとえば、サモアで暮らし始めて1年が過ぎた頃に、スティーヴンソンが自身の周りに対等に話せる相手がいないことを告白する場面がそれに該当する。

コルヴィンの所から写真を送って来た。ファニー（感傷的な涙とは凡そ縁の遠い）が思わず涙をこぼした。

友人！ 何と今の私に、それが欠けていることか！（色々な意味で）対等に話すことの出来る仲間。共通の過去を有った仲間。会話の中に頭註や脚註の要らない仲間。ぞんざいな言葉は使いながらも、心の中では尊敬せずにいられぬ仲間。この快適な気候と、活動的な日々との中で、足りないものは、それだけだ。コルヴィン、バクスター、W・E・ヘンレイ、ゴス、少し遅れて、ヘンリィ・ジェイムズ、思えば俺の青春は豊かな友情に恵まれていた。(123)

1891年6月の『ヴァイリマ通信』で記述されるのは、写真の件と妻の涙だけで、その後続く文人についての記述は中島の想像力の産物である。ここで言

及される人々はスティーヴンソンと親交があった文学関係者なのだが、「恵まれていた」とわざわざ過去形で書かれているところに中島の意図が伺える。

『光と風と夢』におけるスティーヴンソンの孤独は社会生活にとどまらず、家庭生活にまで及ぶ。とりわけ妻ファニーの描かれ方は、およそ好意的とは言えない。たとえば、語り手は W. E. ヘンリーの言葉を借りて「何の為に、あの色の浅黒い・隼の様な眼をした亜米利加女が、でしゃばらねばならぬのか。あの女のためにスティーヴンソンはすっかり変って了った」と述べ、それに続いて「スティーヴンソンの方でも、確かに、ファニーの才能に就いて幾分誤算をしていた所があった」(115)と 10 歳年上の女性に盲目的に恋した若い頃のスティーヴンソンの分別を断じている。さらには、物語の終盤においては、「一体、俺はファニーを愛していたのか？ 恐ろしい問だ。恐ろしい事だ。之も分らぬ。兎に角分っているのは、私が彼女と結婚して今に到っているということだけだ。」(208)と、テキストは作家としてのあり方だけではなく、家庭生活についてもスティーヴンソンの自己懷疑を提示するのである。

他方、中島によるスティーヴンソンはサモア人たちと密接な関係を作り上げる。マターファの軍勢のために東奔西走し、その返礼としてサモア人が自主的に建設したヴァイリマ邸の道路の完成を祝う饗宴の様子が、物語の終盤に描かれる。そこで中島が流用するのは、ツシタラ版全集では補記として掲載されたスティーヴンソンの演説である。

今や諸君の上に大きな危機が迫って来ている。今私の話した諸民族の様な運命を選ばねばならぬか、或いは之を切抜けて、諸君の子孫が此の父祖伝来の地で、諸君の記憶を讃えることが出来るようになるか、その最後の危機が迫っているのですぞ。条約による土地委員会とチーフ・ジャスティスとは、間もなく任期を完了するでしょう。すると、土地は諸君に戻され、諸君はそれを如何に使おうと自由になるのです。奸悪なる白人共の手の伸びるのは其の時です。土地測量器を手にした者共が、諸君の村へやって来るに違いない。諸君の試練の火が始まるのです。諸君が果して金であるか？ 鉛の屑であるか？(200)

列強による植民地主義を強く非難し、サモア人による自治の重要性を訴えるこ

の演説は、スティーヴンソンの政治理念を端的に表すが、サモアにおいてもたびたび発熱や身体の不調に悩まされ、しかも白人社会から排除されるという彼の状況に目を向けるとき、満身創痍で大国に立ち向かう義士としてのスティーヴンソン像を演出する。さらに、『光と風と夢』の最終場面がスティーヴンソンの死を悼むサモア人酋長の描写で締めくくられることも、物語の冒頭に添えられた書簡の内容を裏書きし、ロマンティックで孤独な英雄としてのスティーヴンソン像の構築に寄与する。

しかしながら、『ヴァイリマ通信』が伝えるところによると、スティーヴンソンの白人社会との関係は、中島の作品に示されるほど希薄だったわけではない。大型船や軍艦がアピアに入港するたびに、彼は舞踏会を開き、船長や軍人、船に乗り合わせた著名人を招待していた。また、当時の土地委員を務めていたハガードとの交友の様子は書簡にたびたび登場するし、『タイムズ』に投稿した抗議書で激しく糾弾した裁判所長でさえも、スティーヴンソンはある種の親近感を抱いていたのである^{iv}。しかしながら、これらのエピソードは『光と風と夢』においてはほとんどが省略され、スティーヴンソンがサモアのヨーロッパ人コミュニティから排除された人物として描かれる。

スティーヴンソンの家庭生活の描写も中島の想像力に依るところが大きい。『ヴァイリマ通信』にはファニーの健康状態がしばしば言及されるが、先に挙げた彼女の愛情についてスティーヴンソンの疑念は中島の創作である。また、スティーヴンソンはファニーと前夫との子供とも良好な関係を築いていた。彼はロイドと共作し数編の小説を出版しているし、ストロング夫人をヴァイリマ邸に呼び寄せて、ともに暮らしている。さらには頻繁に家庭内演奏会を催すなど、家族との関係もけっして悪くなかったのである。

中島のスティーヴンソンと現実のスティーヴンソンとの乖離は、両者に共通する身体的脆弱、エキゾチックなものへの憧れと奇譚の愛好による中島敦のスティーヴンソンへの感情移入の強さを表すのかもしれない。しかしながら、川村湊が指摘する、スティーヴンソンの作品を通じて醸成された中島の南海への憧憬も無視することができないだろう^v。なぜなら、『光と風と夢』における孤独なスティーヴンソン像は、太平洋の島という舞台設定がなければ成立し得

ないからである。文明から隔絶された異世界という南方地方が喚起するイメージこそが、「海と島々と土人達と、島の生活と気候とが、私を本当に幸福にして呉れるだろう」というスティーヴンソンの願望充足の物語を可能にするのであり、同時に中島のスティーヴンソンと現実のスティーヴンソンとを結びつけているのだ。そして、ここで問題になるのは中島敦の南海理解の妥当性ではなく、彼の憧れを醸成したスティーヴンソンのテキストにおける太平洋世界の表象形式である。

Ⅲ スティーヴンソンの現実とロマンス

スティーヴンソンは『宝島』や『ジーキル博士とハイド氏』などの空想作家として名声を馳せた一方で、「現実」を描くことに腐心した作家でもあった。それは、随筆「南海にて」におけるスティーヴンソンの姿勢からも伺える。太平洋に出発するときにスクリブナーと契約した「南海にて」が読者の不興を買ったのは、彼が航海中に体験した太平洋諸島の風俗や歴史を克明に伝えようとしたためだったのだ。しかも、スティーヴンソンの姿勢は随筆にとどまらず、冒険小説の執筆の動機にもなったのである。

There is a vast deal of fact in the story, and some pretty good comedy. It is the first realistic South Sea story; I mean with real South Sea character and details of life. Everybody else who has tried, that I have seen, got carried away by the romance, and ended in a kind of sugar-candy sham epic, and the whole effect was lost—there was no etching, no human grin, consequently no conviction. Now I have got the smell and look of the thing a good deal. You will know more about the South Seas after you have read my little tale than if you had read a library. (161)

「ファレサアの浜」の執筆にあたって書かれたこの手紙は、スティーヴンソンの「現実」を描くという強い意志を表す。とりわけ、最後の「この短い物語を読めば、資料を読むよりも南海についてよく分かるようになる」という部分は、

少年の博物学的教育という意図を持ったバランタインの『珊瑚島』を意識したものと解釈でき、これまでの太平洋を舞台とした冒険物語への挑戦状として浮かび上がる。

スティーヴンソンが述べるとおり、「ファレサアの浜」は南海を物語の舞台に据え、そこには太平洋の「現実」がちりばめられている。ケースに象徴される白人の現地人に対する差別的な行動もさることながら、物語においてはタブーという太平洋独自の習慣に焦点が当てられる。交易商のウィルトシアがやってきたファレサアの浜にはすでにケースがコブラ貿易を営んでおり、主人公はケースの取り計らいによって現地人女性ウマと結婚するのであるが、妻がタブーに指定されているため島民を相手にした交易ができなくなる。妻への愛情と交易の苦境の間に揺れ動きながら、ウィルトシアが宣教師タールトンの協力を得て島を支配するケースを倒すという主筋は、タブーが持つ異質性や恣意性を読者に伝える。

さらにこの物語において南海の「現実」を志向するものに、主人公が行うポリネシア人の観察が挙げられるだろう。これまで別の島で行ってきたような交易ができなくなったウィルトシアは、ウマの母が所有する畑でコブラを栽培せざるを得なくなる。しかしながら、島民のように農業に従事することによって、彼は現地の人々と同じ視線から島民の習慣を眺められるようになるのである。たとえば、ウィルトシアは乾燥させた椰子の軽さに驚くと同時に、「これまでどんなに自分が島民によって（コブラの重量を）騙されてきたか知らなかった」

(46) と述べ、島民が少年向けのロマンス小説において繰り返し語られてきたような純粋な現地人ではないことを示唆する。それは、物語の後半において、ケースが劣勢に立っていると判明するやいなや、進んでウィルトシアに寝返る計算高い酋長の姿によっても暗示される。

また、物語の最後に添えられた主人公の独白によっても、スティーヴンソンは太平洋で暮らす白人の「現実」を提示しようとする。

My public-house? Not a bit of it, nor ever likely. I'm stuck here, I fancy. I don't like to leave the kids, you see: and—there's no use talking—they're better here than what they would be in a white man's

country, though Ben took the eldest up to Auckland, where he's being schooled with the best. But what bothers me is the girls. They're only half-castes, of course; I know that as well as you do, and there's nobody thinks less of half-castes than I do; but they're mine, and about all I've got. I can't reconcile my mind to their taking up with Kanakas, and I'd like to know where I'm to find the whites? (75)

故郷に帰って酒場を経営するというウィルトシアの夢は、若い頃の美しさを失ったウマと、子供たちのせいで叶えられることはない。イギリスに連れて帰ったとしても、家族がヨーロッパ人の偏見にさらされるため、白人の血を引いていることが優位に働くポリネシアにとどまった方がウィルトシア家にとっては幸福なのである。現地人にたいする偏見を捨てきれない主人公の姿は、忸怩たる思いを抱きながら過ごさなければならない彼の将来を暗示する。ウィルトシアはライバルを倒すことで成功を手にするが、それはあくまでもつかの間の恍惚感であり、それが醒めたときには 19 世紀末のヨーロッパ人が抱く人種偏見という現実が襲いかかるのである。

このようにして「ファレサアの浜」は冒険小説の枠組みを借りて、南海の「現実」を読者に伝えようとする。しかしながら、作品が果たして作家の当初の意図を十分に反映しているかという点では、そうとも言い切れない。バリー・メニコフによれば、その原因の一つは「ファレサアの浜」の出版環境にあるという。スティーヴンソンの作品出版において長らく中心的な役割を果たしたシドニー・コルヴィンは、友人のサモアでの政治活動を快く思わず、作品における政治的な色合いを警戒していた。実際、現地人の英語を再現しようとする作家の意図は編集段階でかなりの削除や改変を受けた。しかも、イギリスの反対側にいたスティーヴンソンは、通信と出版期日の制約から、そうした編集側による変更の一部は許容するしかなかった^{vi}。

皮肉なことに「ファレサアの浜」が当時の読者に好意的に受け入れられたことも、スティーヴンソンの意図が十分に伝わらなかった可能性を示唆する。ロマンス作品としての完成度の高さは、作家が用意した太平洋の「現実」を単なるエキゾチックな小道具へと矮小化してしまうのである。「ファレサアの浜」

は二人の商人の死闘によって物語のクライマックスに達するが、そこに至るまでのウィルトシアの改心や宣教師との和解、そしてケースの悪辣さの強調は、主人公に殺人の正当性を付与するものとして機能する。翻って考えると、太平洋世界という特殊な環境こそが、主人公の冒険と行為の正当性を保障するのであり、作家が意図した「現実」の太平洋は物語の背景に埋没してしまうのである。

IV 冒険物語としての「歴史への脚注」

ロマンスと「現実」の両立の困難さは、フィクションだけではなくスティーヴンソンの政治的態度が明確に表わされた「歴史への脚注」(1892)でも顕在化する。この作品はサモアの民族紛争と列強の関与を論じたものであるから、現地の「現実」をヨーロッパに伝えるというスティーヴンソンの意図は疑いようがない。しかし問題となるのは、物語が「ファレサアの浜」と同様に、冒険物語の枠組みで語られているように見えてしまうことである。

「歴史への脚注」は11章から構成される。最初の2章でサモアの民族紛争と、国外勢力の関わりを事件の前提条件として述べた後、続く7章で、マターファの軍勢の形成、ドイツによるサモア人への政治策謀、英米との交渉を描く。そうした歴史の流れにおいて、スティーヴンソンが転換点と見なすのは第10章の「ハリケーン」であり、その冒頭ではアピアの港と集結する列強の軍艦の様子が時系列に沿って読者に提示される。筆致が変化するのはハリケーンの到来の場面である。

Day came about six, and presented to those on shore a seizing and terrific spectacle. . . . The wind blew into the harbour mouth. Naval authorities describe it as of hurricane force. It had, however, few or none of the effects on shore suggested by that ominous word, and was successfully withstood by trees and buildings. The agitation of the sea, on the other hand, surpassed experience and description. Seas that might have awakened surprise and terror in the midst of

the Atlantic ranged bodily and (it seemed to observers) almost without diminution into the belly of that flask-shaped harbour; and the war-ships were alternately buried from view in the trough, or seen standing on end against the breast of billows. (202)

最初に比較的短い文を並べ事実を淡々と伝える印象を与えているが、後半部は一気に畳みかけるような文体になるし、陸と海の様子を対照的に描くことで、海の恐怖をさらに高めている。このときマターファとドイツ軍が、それぞれ陸と海とに別れて対峙していることを考えると、この場面の描写は現地人の軍勢の視点からのものとなり、嵐に襲われつつも無事にやり過ごすサモア人たちと、ハリケーンに翻弄されるヨーロッパ人という状況を間接的に読者に提示する。そして、この状況こそが「歴史への脚注」をロマンスの枠に適合させるのに大きく寄与するのである。

アピア湾を襲った嵐が列強の軍隊に大きな損害を与え、それを契機として3国間条約に至ったことは事実である。しかしながら、スティーヴンソンの語りは政治的なものよりも、現地人の献身的な姿勢に焦点を当てる。

What more natural, to the mind of a European, than that the Mataafas should fall upon the Germans in this hour of their disadvantage? But they had no other thought than to assist; and those who now rallied beside Knappe braved (as they supposed) in doing so a double danger, from the fury of the sea and the weapons of their enemies. (204-5)

ここにおいて作者が強調するのは、現地人の慈愛に満ちた精神である。敵の不利に乗じて攻撃をするのではなく、人道的見地に立って敵味方の区別なく救助に奔走するサモア人は、イギリスの伝統的な冒険小説における倫理的な主人公の姿を想起させる。そして、最終章「ラウペペとマターファ」で語られる列強による傀儡体制の樹立は、マターファを悲劇のヒーローに仕立て上げる。こうした「歴史への脚注」における語りとロマンスの近接性は、「フェレサアの浜」と同様に、スティーヴンソンの意図を物語の背後に隠蔽してしまいかねない。作品の娯楽性が、ヨーロッパからの距離と相まって、太平洋自体を非現実な空

間へと変容させるのである。

V 遅れてきた植民地の主人

スティーヴンソン自身が 19 世紀の「現実」と乖離していたことを示す写真がある。1892 年 1 月にヴァイリマ邸で撮影された写真はスティーヴンソンのサモアでの生活を雄弁に物語る。コロニアル様式のベランダの中央にはスティーヴンソンとファニーが座り、スティーヴンソンの左には義理の息子オズボーン、彼の左にはマーガレットがカメラに横顔を見せるような姿勢で椅子に腰掛けている。彼らを取り囲むように腰巻き（ラバラバ）を身に着けた屈強な 6 人のサモア人男性と 1 人の女性がおり、男性のうちの 1 人は手に斧を持って警戒した視線を左手に送る。写真の中で腕を組んだスティーヴンソンの姿が醸し出しているものは、まさに「昔の封建領主のような雰囲気と満足感」(91)というデヴィッド・デイシスの表現が当てはまる。

この写真はスティーヴンソンの行動の矛盾も提起する。彼が豊かな生活を享受できるのは、ヨーロッパの植民地主義が太平洋世界にまで及んだためであり、そうした意味では彼も植民地主義の加担者なのである。植民地主義の恩恵を受けつつも、列強を批判することは、そのままサモアにおけるスティーヴンソンのあり方を問い直すものとなる。しかしながら一方で、植民地におけるヨーロッパ人と現地人との間には明確な格差があり、ヨーロッパ人が西洋の生活を放棄するということは考えられなかった。このような現実の中で、スティーヴンソンが取り得た態度とは、現地人に味方する「善き白人」になるということであり、フィールドハウスの言葉を借りれば『未開の人々』をよくするために、より進んだ文明からやってきたキリスト教徒の道徳的義務（23）を果たすことなのである^{vii}。そして、この義務感の根底にあるのが、現地人を子供として位置づける認識なのだ。

太平洋の人々が発達した西洋人に対する「子供」だという見方は、スティーヴンソンが太平洋の生活を語る際にたびたび開陳されるし、「歴史への脚注」においても繰り返し読者に提示される。サモア人がプランテーションで盗みを

働くことを「イギリスの学童が果樹園で果物を盗るようなもの」(92)と説明されているだけではなく、マターファが指揮する「現実」の戦争でさえ、「高価な銃や薬莖が、ガイ・フォークス捕縛記念日の爆竹やネズミ花火のように使われる」ような「子供の戦争」(166)とされる。サモア人と列強の戦いは、ヨーロッパ人は「少年の親玉が突然立ち上がって、学生寮から監督官を追い出す」(186)ようなものとして解釈すべきだと語られる。

また、小説のなかでも同様の認識が示される。たとえば、「ファレサアの浜」においてウィルトシアが、現地人と親交を通して到達する結論も「子供」としてのポリネシア人である。

It's easy to find out what Kanakas think. Just go back to yourself any way round from ten to fifteen years old, and there's an average Kanaka. There are some pious, just as there are pious boys; and the most of them, like the boys again, are middling honest and yet think it rather larks to steal, and are easy scared and rather like to be so.
(58)

ケイスは島民を支配するために、風によって音が出る箱や不気味な洞窟を作り上げるのだが、そうした仕掛けに恐々とする彼らを、主人公は「10～15歳」の西洋人の子供の姿に重ね合わせる。ここで言及される窃盗の習慣は、18世紀後半に太平洋諸島を発見した探検家をたびたびなやませた現地人の特質であり、ウィルトシアはそれも子供が行う「おふざけ」と考える。

しかしながら、この認識も当時の規範に照らし合わせると、けっして目新しいものではない。実際、現地人を子供として扱う態度は、植民地主義を正当化するためにヨーロッパが長らく装ってきたものであるし、植民地を扱った冒険文学の作品にも頻繁に表れる。たとえば、19世紀の代表的な冒険小説『珊瑚島』の主人公たちが褐色の人々に接する場面や、古くは『ロビンソン・クルーソー』におけるロビンソンとフライデーの関係にもそうした態度を読み取ることができるだろう。その伝統ゆえ、19世紀末にはこうしたレトリックは既に批判の対象となっていたし、シドニー・コルヴィンなどが、スティーヴンソンにたいしてサモア問題に深く関わらないよう強く勧告したのも、政治活動が執筆に与え

る影響ばかりではなく、友人の信念が孕む危険性を看取していたためだと考えられる。その一方で、時代遅れの信念を頑なに奉じる姿は、スティーヴンソンにある種のロマンティズムを付与する。母国の裏側で現地の内戦に関与し、投獄の危険にも遭遇する冒険小説家は、太平洋での客死という点でもバイロンの英雄として浮かび上がる。こうしてスティーヴンソンは、中島敦が孤独なヒーローとして描くに相応しい物語の題材となりえたとし、自身が得意とした冒険小説の登場人物を体現しえたのである。

VI 太平洋を描くことの難しさと中島敦の失望

「ファレサアの浜」や「歴史への脚注」は「現実」の太平洋を描こうとする試みがいかに困難なことであるかを暗示する。「ファレサアの浜」が示すのは、太平洋の「現実」が編集の過程において換骨奪胎されかねない可能性であるし、また冒険小説の枠組み自体が「現実」を語ることを阻害するという二律背反性である。また、「歴史への脚注」はサモアの現実とロマンスの近接性によって、「現実」が物語の背後に隠れてしまうことを示唆する。こうした現象は、作品が提示する世界観だけではなく、読者が思い描く作家のあり方によっても大きな影響を受ける。『光と風と夢』における孤独な英雄としてのスティーヴンソン像は、スティーヴンソン自身が彼の残した作品の潜在的なモデルになりえたことを物語る。すなわち、スティーヴンソンの意図が彼の思い通りにならなかったのは、彼自身のロマンティックな姿も少なからず影響しているのだ。スティーヴンソンと中島のテキストは、太平洋が、それが語られる物語の枠組み、語り手、編集者、作家の思想、読者の作家像、さらには太平洋についてのイメージ、という様々な要因によって変容されることを物語る。

中島敦の南洋への失望は、そうした変容された太平洋像の産物でもある。1941年9月にパラオからヤルト島に出張した中島は、現地の人々からの盛大な歓待と、サモアのウム料理に似た蒸し焼き料理に非常な満足を覚えるが、そこを気に入った理由として手紙には「一番開けていないからで、スティヴンソンの南洋に近いからだ」(607)と記しているし、日記にも「スティヴンソン

やロティの世界の如し。かかる島々に黒き楽団をつれて旅するは、如何に楽しきことぞ！」(470)と書き残す。しかしながら、中島にとってこの出張はそうした幻想を破壊する「現実」を突きつけられる旅でもある。南洋に赴いて半年も経たないうちに、彼は「今回旅行して見て、土人の教科書編纂という仕事の、無意味さがはっきり判って来た。」(631)という胸の内を妻に明かしているし、12月の手紙には、「文化人は、肉体的にも、精神的にも、南洋は住めないらしいな。(中略)精神的には完全な島流しだし、肉体的には、しょっちゅう、火あぶりにあってるようなものだ。」(648)と南洋そのものへの落胆を綴っている。中島敦は『光と風と夢』の原稿を書き上げてから南洋に旅立ったが、もし彼の南洋体験が作品の執筆に先行していたら、果たしてスティーヴンソンはどのように描かれただろうか。

注

本論考は2010年にスターリング大学におけるスティーヴンソン学会での発表‘Locating the Pacific Stevenson in Japanese Literature’を大幅に加筆修正したものである。なお、本論考および研究発表は平成19～21年度の科学研究費・基盤研究(C)「ヨーロッパの南太平洋像の変容と、現代太平洋文学における主体形成についての研究」の成果の一部である。

i 山下真史、p. 147 参照。

ii 岩田一男、pp. 349-50 参照。

iii 中島敦の作品や書簡からの引用は全て新仮名遣いに改めた。参照頁番号は全集にもとづく。

iv 1892年9月13日付のコルヴィンに宛てた書簡で、スティーヴンソンは舞踏会での裁判所長との邂逅を語っている。*Letters*, pp. 367-8 を参照。

v 川村湊、pp. 269-70 参照。

vi 「ファレサアの浜」における作家の意図と編集者のそれとの乖離については、Menikoff, pp. 58-90 を参照のこと。

vii スティーヴンソンが首都の白人街から離れ、背後に反乱軍の軍勢が潜むヴァイリマに居を構えたことも、彼の白人社会にたいする抵抗として解釈できるだろう。

参考文献

- Balfour, Graham. *The Life of Robert Louis Stevenson*. London: Methuen, 1913.
- Daiches, David. *Robert Louis Stevenson*. Norfolk: New Directions, 1947
- Fieldhouse, D. K. *Colonialism 1870-1945: An Introduction*. London: Macmillan, 1983.
- 岩田一男. 「『光と風と夢』と *Vailima Letters*」 『一橋大學研究年報人文科学自然研究』 第1号, 1959: 339-398.
- 勝又浩. 『中島敦の遍歴』 東京: 筑摩書房, 2004.
- 川村湊. 『南洋・樺太の日本文学』 東京: 筑摩書房, 1994.
- 川村湊 編. 『文化の中の植民地』 東京: 岩波書店, 1993.
- . 『狼疾正伝: 中島敦の文学と生涯』 東京: 河出書房新社, 2009.
- Keene, Donald. *A History of Japanese Literature*. New York: Columbia UP, 1995.
- Kratoska, Paul H. *Imperial Decline: Nationalism and the Japanese Challenge, 1920s-1940s*. London: Routledge, 2001.
- Mehta, Uday Singh. *Liberalism and Empire: A Study in Nineteenth-Century British Liberal Thought*. Chicago: Chicago UP, 1999.
- Jolly, Roslyn. *Robert Louis Stevenson in the Pacific: Travel, Empire, and the Author's Profession*. Aldershot: Ashgate, 2009.
- Menikoff, Barry. *Robert Louis Stevenson and 'The Beach of Falesá': A Study in Victorian Publishing with the Original Text*. Stanford: Stanford UP, 1984.
- 中島敦. 『中島敦全集』 東京: 筑摩書房, 2001.
- Peattie, Mark R. *Nariyo: The Rise and Fall of the Japanese in Micronesia, 1885-1945*. Honolulu: U of Hawai'i P, 1988.
- 鷲只雄. 『中島敦論: 「狼疾」の方法』 東京: 有精堂, 1990.

斎藤一. 『帝国日本の英文学』 京都: 人文書院, 2006.

Smith, Janet Adam. *R. L. Stevenson*. London: Duckworth, 1937.

Stevenson, Robert Louis. *The Works of Robert Louis Stevenson*. Ed. Sidney Colvin. 35 vols. London: William Heinemann, 1924.

---. *The Letters of Robert Louis Stevenson*. Eds. Bradford Booth and Ernest Meyhew. 8 vols. New Haven: Yale UP, 1994, 1995.

田鍋幸信. 『中島敦：光と影』 東京: 新有堂, 1989.

田鍋幸信 編著. 『日本におけるスティーヴンソン書誌』 東京: 朝日出版社, 1974.

Weiner, Michael. ed. *Indigenous and Colonial Others*. London: Routledge, 2004.

山下真史. 『中島敦とその時代』 東京: 双文社, 2009.